Osaka University Knowledge Archive

Title	唐の羈縻支配と九姓鉄勒の思結部
Author(s)	鈴木, 宏節
Citation	内陸アジア言語の研究. 30 P.223-P.255
Issue Date	2015-07-25
Text Version	publisher
URL	http://hdl.handle.net/11094/70120
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

唐の羈縻支配と九姓鉄勒の思結部

鈴 木　宏 節

はじめに

唐帝国が 7 世紀半ばに最大版図を実現した背景に，トルコ系遊牧民の存在があったことは強調されてやまない．いわゆる中国本土（チャイナ=プロパー）という定住農耕世界を統一した唐王朝が新たに誕生させた中央ユーラシア世界における覇権とは，騎馬軍団の機動力によって圧倒的な軍事力を有していた遊牧民との共同事業であった．すなわち，唐の太宗によって 630 年に討伐された突厥，続く高宗の治世のもと 646 年に制圧された九姓鉄勒といったトルコ系遊牧民の集団が，羈縻支配と称される唐の間接統治下に編入され，各地の征服活動に従事していった．その結果として唐は，西方で西突厥を打倒して中央アジアのシルクロードにおけるオアシスの利権を獲得し，東方で高句麗遠征を成功させて朝鮮半島にまで地歩を築いたのである．

したがって，唐がどのように遊牧民を支配し彼等を麾下の軍団に組み入れていたかを検討することは，かかる唐帝国の拡大が中央ユーラシア世界に，あるいは東アジア世界各地におよぼした影響に鑑みて不可欠な作業である．また一方で，遊牧民が唐の支配をいかに受容し，それに対応していったのかを検証する作業も，中央ユーラシア世界における遊牧民の変容究明に資する重要課題である．とりわけ，羈縻支配の実態解明は，唐の中央ユーラシア進出を可能にした，いわゆるタブガチとテュルクの関係を世界史上に位置付けるための関鍵であるように思われる．つまり，鮮卑拓跋国家としての唐「タブガチ」と，トルコ系遊牧国家たる突厥「テュルク」ならびに部族連合の九姓鉄勒「トクズ=オグズ」との共生関係や葛藤こそが当該時代を映し出す鏡ではあるまいか．

ところが，羈縻支配時代における唐と遊牧民との関係を物語る史料は，中国王朝側に蓄積された漢文史料である(1)．その大半が編纂史料であり，漢文墓誌をのぞけば一次史料はほぼ皆無と言ってよい(2)．あるいは遊牧民側に残された文献史料はほとんど望むべくもない現状である．

しかし近年，新たなトゥルファン出土文書の研究が発表され，羈縻支配下の遊牧民がソグド人を仲介に唐帝国と結びつけられていたという史実を鮮明に浮かびあがらせた［栄 2008］．また，モンゴル高原で二基の墳墓があいついで発掘されたニュースは記憶に新しい(3)．7 世紀の九姓鉄勒に由来するとみられる両墓から出土した大量の唐様式の副葬品は，唐帝国とトルコ系遊牧民との関係を見直してもなお余り有る存在感をもっている．

本稿は，かつてモンゴル高原で発見された碑文をとりあげ，それが当該期の史資料となり得るか否かを検証する．この作業により，東アジア世界における中国の歴史に対しても中央ユーラシア世界における遊牧民の歴史に対しても，その史料状況を好転させる一助になれば幸いである．

---

(1) 羈縻支配時代の研究は基本的に漢籍の記述に依拠している［ex. 譚 1990; 劉 1998］．トルコ系遊牧部族連合たる九姓鉄勒についても，基礎研究が各正史の「鉄勒伝」「回鶻伝」を一括して翻訳，分析しているように［佐口・山田・護 1972; 劉 1989］，同様の状況である．他方，九姓鉄勒の歴史はウイグル可汗国の前史として扱われてきた［ex. 小野川 1940; Mackerras 1972］．また，漢籍に現れる鉄勒や九姓鉄勒を，かつまた古代トルコ語の Toquz Oγuz トクズオグズという集団を，どうとらえるべきかが長らく議論されてきた［ex. 羽田 1919; Hamilton 1962; 片山 1981］．

(2) 漠南に散居することになった突厥遺民については，石見清裕氏が漢籍の記述を整理し，かつ出土墓誌の研究に先鞭をつけた［ex. 石見 1986; 石見 1998, pp. 179-278「第 II 部 新出土史料より見た唐代テュルク人の存在形態」］．とりわけ近十数年は，唐に帰服した後，長安などで没した突厥王族の墓誌が陸続と発見され，羈縻支配の実態を再考すべく研究が蓄積されている．

(3) 2009 年，トヴ県 Заамар ザーマル郡で墳丘墓が発掘され，儀鳳三年（678 年）の紀年を持つ漢文墓誌銘をはじめ，多数の副葬品が出土した．その後，2011 年，今度はその遺跡からトーラ川を挟み約 7 km，ボルガン県バヤンノール郡のオラーン=ヘレム Улаан хэрм という草原で墳丘墓の発掘が行われ，7 世紀後半に年代付けされる副葬品が多数出土した．両遺跡ともショローン=ボンバガル（Шороон бумбагар）の呼称があるため，報告書の引用に際しては前者を ЗМ と，後者を УХ と略す．

１．ハラーゴル碑文と漢文テキスト

本稿は，モンゴル国セレンゲ県（アイマグ）マンダル郡（ソム）で発見されながら，カザフスタン共和国の出版物『オルホン碑文完全アトラス』［OPXOH］において，管見の限り，学術的にはじめてまとまった解説が発表された碑文をとりあげる．発見地に流れる河川にちなんで，その名をハラーゴル碑文と呼ぶ．

１．１．ハラーゴル碑文の概観

本碑文は当該書籍に所載の写真〔図１・２〕で示すがごとく，中国風の石碑である．特筆すべきは，その碑額部分に人間の顔面が浮き彫りにされているという，大変ユニークな外見である．まず，件のカザフ語出版物から当該碑文の解説を引用し，あわせて掲載された図版を示すことで，この碑文とそれが発見された遺跡の概況を示すことにしたい．

ハラーゴル遺跡［OPXOH, pp. 54-57］[4]

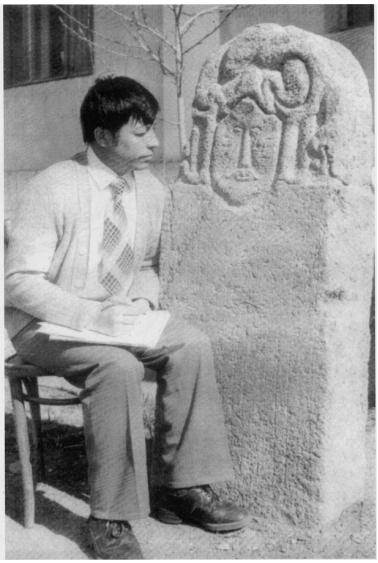
【所在地】セレンゲ県ズーンハラー郡〔著者注―正確にはズーンハラー市であり，行政区画上はマンダル郡が正しい〕，ハラー川（ゴル）〔著者注―カザフ語では遺跡名とともに Қарағол カラ川（ゴル）と表記されているが，本稿ではモンゴル語による原音表記 Хараа гол にしたがった〕とボロー川の合流地点付近．ボロー川東岸にある農耕地帯の中央．バヤン=ソーダル山の西側にある．

【調　査】本遺跡にある碑文には漢文が記されている．1976 年にサルトクジャウリ（=ハルジャウバイ）が当遺跡の調査を行い，その報告書で紹介し［文献 156[5], p. 32］，この報告書にはこの遺跡を含めた探検調査の概要が書かれ，（別の）出版物の表紙に（写真と）短文の要約が掲載されている［文献 126〔著者注―［Қаржаыбай 2003］を指す〕, pp. 109-110］．

---

(4) 当該部分の翻訳は，滋賀県立大学博士前期課程の八木風輝氏にご協力いただいた．ここに記して感謝申し上げる．当然のことながら，誤訳等の責任は著者にある．

(5) Харжаубай, С., *1976-1978 оны хээрийн шинжилгээний тайлан*, Түүхийн хүрээлэнгийн гар биумэлийн сан (архив).〔著者注―科学アカデミーの内部資料を指す．未確認〕



〔図１〕ハラーゴル碑文［OPXOH, p. 56］(6)

〔図２〕ハラーゴル碑文［OPXOH, p. 57］

【詳　細】ハラーゴル遺跡は 70 m × 40 m に囲まれた範囲のことをいう．この遺跡内にある広場の西方に石槨〔著者注―装飾がほどこされた板石囲い，「サルコファガス」のこと〕が存在する．トラクターによる開墾が行われた際に石槨の側面が出土したため，耕作地の開墾が中止されたようだ．この遺跡全体に 6 つの石槨がある．各石槨のサイズは，280 cm × 210 cm × 20 cm である．そして，一面にだけデザインが描かれている．また，地表に出ている石が中央から四方に拡散しており，そこに 20 cm の穴が開いている．ハラーゴル遺跡内には亀石〔著者注―中国碑における亀趺を指す〕があったようだが，耕作中に壊れてしまったという．そのため，この石の計測は行っていない．

(6) ハルジャウバイ氏と碑文を撮影したこの写真は，初期ウイグル可汗国についての専著［Каржаубай 2002］に掲載されているものとまったく同じものであるが，そこには説明が一切添えられていなかった．

この亀石の後方に碑文が立っている．その碑文は 1976 年の夏にモンゴル科学アカデミー歴史研究所考古学研究室が調査したものだった．碑文の上部には人面が彫られており，さらにその両側頭部から頭頂部にかけて，狼の頭が石柱の 2 方面に向かって刻まれている．その中央部には，曲折した蛇の胴を模したようなものが描かれている〔画像 No.2＝図３〕(7)．

〔図３〕碑文の上部

この碑文の高さは 170 cm，横幅は 60 cm，奥行きが 25 cm である．石の素材は灰緑がかった花崗岩である．碑文の人面の下部から 16 行の漢文が刻まれており，漢文の 1 行毎の間隔は 5 cm，文章全体で 117 cm に至る．

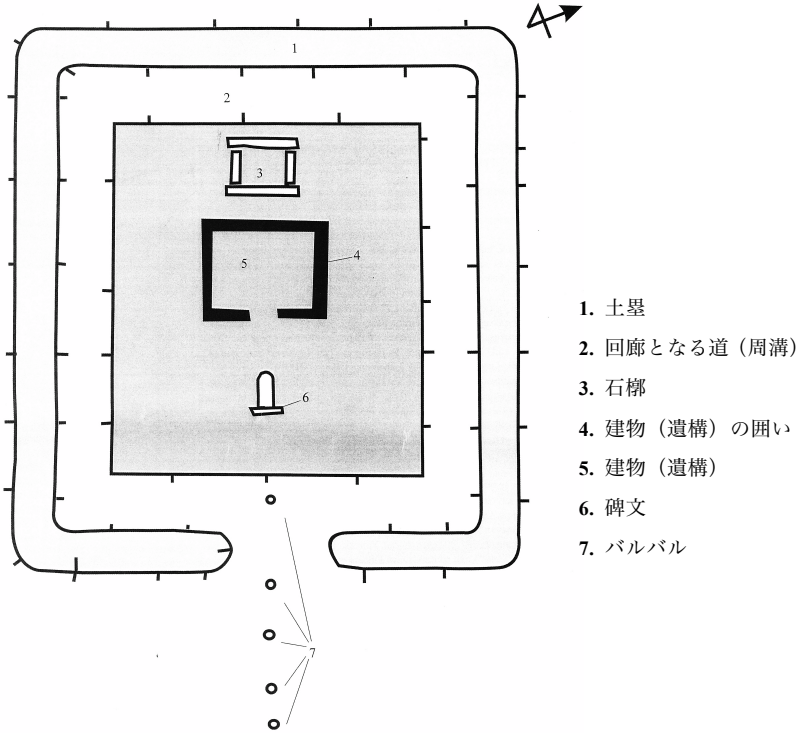
この遺跡では建物（遺構）が発見された〔著者注―直訳すると「建物」．ブグト遺跡の出土状況に鑑み「中国風の瓦葺き屋根を持つ建物（廟の遺構）」と解釈する〕．その建物（遺構）ではボガト遺跡〔著者注―アルハンガイ県イフタミル郡のブグト遺跡．引用文のため原音表記した〕で発見されたような，2 種類の瓦もあった．その建物（遺構）には屋根がかぶせてあったが，それらの大きさや高さは測定されていない．

また，この遺跡からバルバルも発見された．広場から 120 m ほど離れた所に 12 体のバルバルが崩壊せずに残っている．バルバル間の距離は 2.5 m である．そのため 30 m 内に 12 体のバルバルが残っていることを考慮すると，150 m の距離に 70 体近くのバルバルが立っていたことになる．

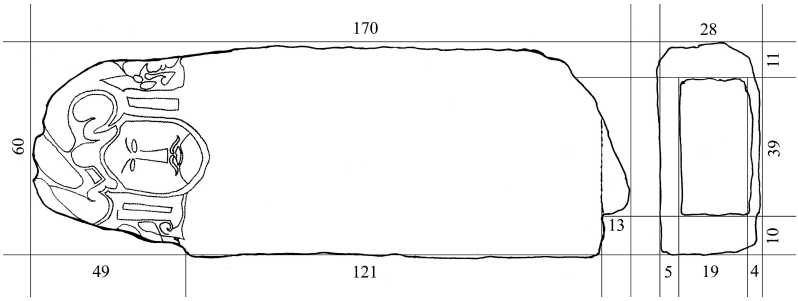
これらの調査を通じて（判断するに），この遺跡は初期突厥時代にできたものであろう．そこには，壺の破片や石槨，回廊となる道（周溝）があり，そうした特徴から，イデル遺跡〔著者注―ツェツーフ遺跡ともいう．ザウハン県イフオール郡に現存，突厥第一可汗国時代（552~630 年）の遺跡と推測されている〕やボガト遺跡に類似している．

(7)　［OPXOH, p. 56］に掲載されているこの〔画像 No.2〕は左右反転されていたので，実際に現物と正対するように反転させ〔図３〕として掲載した．

〔図４〕ハラーゴル遺跡の平面図［OPXOH, p. 54,〔画像 No.1〕］



〔図５〕碑文の実測図（計測・作図：鈴木宏節　単位：cm　前掲〔図３〕を利用）



以上のように，碑文そのものの存在もさることながら，随伴する遺跡や遺物の情報ひとつひとつにいたるまで極めて興味深い．その特徴をまとめると，第一に，漢文碑文であるが，6 世紀に建立された，ソグド文字でソグド語を刻むブグト碑文のように中国風の碑頭を備え(8)，亀趺も発見の当初は確認できた点．第二に，年代判定に関して，残念ながら農地開発によって大部分が破壊を被ってしまっているが，周溝や土塁，石槨，バルバルなどをともない，考古学の観点から古代トルコ時代の遺跡とみなしうる点，である(9)．

１．２．ハラーゴル碑文の研究史

ところで，この特徴的な外貌の碑文とその発見について，これまで情報がまったくなかったわけではない．

まず，この碑文の存在は，1976 年に実施されたソヴィエト連邦・モンゴル人民共和国の合同歴史遺跡調査の翌年(10)，1977 年に刊行されたソヴィエト連邦の考古学年刊において紹介されていた(11)．その「モンゴルにおける銘文」欄で，碑文がセレンゲ県のボロー川の渓谷で発見されたこと；亀趺に設置するためのほぞがある，四面が研磨された碑石であったこと；そのサイズ ―― 1.70 × 0.60 × 0.25 m；16 行の銘文が存在すること；碑石の上部にトルコ武人の顔が浮き彫りにされていること；7 世紀後半から 8 世紀に作成されたもの

---

(8) ブグト遺跡ならびに碑文は，突厥第一可汗国の第四代他鉢（タトパル）可汗（位 572~581 年）に由来する．現地調査に基づく碑文テキストの研究動向や遺跡の概況については，［吉田・森安 1999, p. 122-125; 林 2005, pp. 47-77］を参照のこと．

(9) モンゴル高原における古代トルコ時代の遺跡や遺物，またそれらを決定する指標やそれらにともなう問題点については，［林 1999; Stark 2008］を参照されたい．

(10) ちなみに，この合同調査の際，引用文で言及されているイデル（ツェツーフ）遺跡や，ウイグル可汗国の第二代可汗 磨延啜（位 747~759 年）の軍功を記念するテス碑文も調査されている．

(11) *Археологические Открытия 1976 года*, Москва, 1977, p. 588. なお，モンゴル国科学アカデミー考古学研究所のD.ツェヴェーンドルジ所長によれば，この遺跡は既に 1961 年，D.ドルジ博士によって発見されていたということである．碑文と遺跡は，近隣の都市名である Зүүнхараа ズーンハラーを冠して呼ぶこともあるようだが，本稿は［ОРХОН］の呼称に従った．また，本稿末の〔地図〕を参照されたい．

であろうこと，等が報告されていた．しかし残念ながら，ここには碑文の写真も掲載されていなければ，銘文の内容についても言及がなかった．

つぎに，モンゴルのサンジミャタフ氏による『アルハンガイ県における古代歴史文化記念碑』という著作のなかで，碑文の写真がはじめて掲載された［Санжмятав 1993, Таблиц 120］．ところが，その 2 枚の写真の解説文［*Ibid*., p. 48］はあきらかにブグト碑文のものである．どちらの碑文も碑頭にレリーフがほどこされているから(12)，ハラーゴル碑文の写真を手違いで掲載してしまったものと思われる．なお，この写真以外，本碑についての情報は一切含まれていない．

その後，1996 年，ヴォイトフ氏がモンゴル高原における古代トルコ考古学の専著を刊行し，その第三章「古代トルコの神々と世界観」第四節「銘文付き記念碑」で，ハラーゴル碑文に施された碑頭レリーフのイラストを掲載している［Войтов 1996, p. 102, Рис. 62］．そこでは同碑が，中国の影響を受けた龍の造形を持つ碑文の作例として紹介された［*Ibid*., p. 103］．ただ残念なことに，ボロー川の碑文と注記があるだけである．

また，引用文中で述べられているように，2003 年，ハルジャウバイ氏自身が『オルホン遺跡』という別の図版集をカザフで出版し，本碑文のカラー写真を掲載している［Қаржаыбай 2003, pp. 109-110］．しかし，ヴォイトフ氏に同じく，ボロー川の碑文であると記されているだけであった．

以上のように，本碑文はその由来が不詳のまま，30 年近く放置されてきたことになる．ようやく 2005 年にカザフスタン共和国から件の出版物［ОРХОН］が発表され，はじめて検討材料が提供されたといってよい．

奇しくもこの 2005 年，著者はこの碑文の拓本を実見する機会を得た．それはモンゴル国の A.オチル博士（当時，国立歴史民族博物館館長）が大阪大学に寄贈されたものであった．そして，翌 2006 年 8 月，著者はモンゴル国に渡

(12) ブグト碑文の碑頭に彫刻された動物のレリーフについては，突厥の始祖伝説である狼祖説話の象徴とみなし，それを狼とみなす学説がある［ex. Klyaštornyi & Livšic 1972, p. 71; 内藤 2004, pp. 41-42］．他方，中国の影響を重視して，それを龍と見る見解がある［ex. 大澤 2014, pp. 236-239］．

航し，オチル博士の許可を得た上で，大阪大学の大澤孝氏（当時，大阪外国語大学）とこの碑文を実見するとともに，首都ウランバートルの民族博物館の前庭で拓本を採取したのである［Бичээс II, pp. 7-8］.

１．３．ハラーゴル碑文の釈読

従来, 碑文テキストの内容が報告されていないことから類推されるように，そして確かに碑文の実見によっても判明するように，ハラーゴル碑文の刻文面は摩滅が著しく進んでおり，拓本によってもわずかな字句しか判読することができない．それに対して，罫線は比較的良好に残存していて，3.5 cm の等間隔で 15 本が確認できる．このことから，漢文は 16 行記されていたことが推測される．文字はほぼ 3.0 × 3.0 cm の等間隔に刻まれた楷書体である．

また一方，1-3 行目の下部や 16 行目の下部は罫線すら確認できず，拓本にも反映されないほどの摩滅状態にある．最大限に罫線が確認できる 10-14 行目には，残画の状態からみて 29 文字まで刻むことができたはずなので，当初は碑文全体で 464 文字程度の漢文が刻まれていたのであろう．

なお，特筆すべき部分は，6 行目から 11 行目の上部である．ここは，浮き彫りにされた人面の顎の部分にあたり．それぞれ 2 文字分が字下げされた格好になっている．実見しても，明らかに人面が先に彫られ，その後に漢文が記されていることがみてとれる．一般的な中国碑では，ここに碑額が刻まれるはずであり，それに優先して人面が彫られたということは，本碑文が刻まれた背景に非中国側の強い意向があったとみられる．この点については，碑文の作成背景を検討する際に再度とりあげることにしたい．

それでは，漢文の釈読を提示する．底本には 2005 年に寄贈された大阪大学所蔵の拓本［**Plate X**］をもちいた．そこに，2006 年 8 月 8 日，碑文を実見した成果を加味している．釈読した文字の中には，かなりはっきりした残画も多い．しかし本稿では，文字が刻まれていたであろうと推測される部分を，その残画の状態に関係なく，すべて□で示した．

〔ハラーゴル碑文釈読〕

16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
□	□	□	□	□							□	□	□	□	□
□	□	□	□	□							□	□	□	□	□
□	□	□	□	□	□	盧	蒙	□	□	□	承	於	陵	大	□
□	□	衛	□	□	□	山	公	□	安	□	諭	高	□	□	□
□	□	□	□	李	□	都	資	□	公	□	輔	塞	□	□	□
□	年	□	□	□	里	督	□	□	盧	□	□	□	□	□	□
□	□	□	□	□	□	□	□	□	山	□	乃	霊	□	□	□
□	月	□	□	囲	□	□	□	□	人	□	糸	□	□	内	□
□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□		□	□	□	□
□	九	□	□	□	公	□	□	諸	其	□	朝	飛	□	於	□
□	日	□	□	□	□	□	□	□	□	□	命	翼	□	斗	□
□	□	□	□	奔	命	□	□	冊	□	□	□	将	於	星	□
□	□	□	□	□	蔵	□	□	命	□	下	□	永	絶	大	□
□	□	□	□	□	□	□	□	□	氏	□	□	雞	域	地	□
□	□	□	□	□	□	□	□	言	之	□	□	田	□	開	□
□	□	□	□	□	□	□	□	□	苗	□	□	□	□	疆	□
□	□	□	□	□	□	□	□	父	裔	□	□	□	□	□	□
□	□	□	□	□	□	□	□	烏	宗	□	□	□	□	□	
		□	□	□	□	□	□	碎	□	□	□	□	□	□	
		□	□	□	□	□	□	左	□	□	□	□	□	□	
		□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	
		□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	
		□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□			
		□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□			
		□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□			
		□	□	□	□	□	□	高	□	□	□	□			
		□	□	□	□	□	□	□	□	□	□	□			
		□	□	□	□	□	□	□	□	□					
		□	□	□	□	□									

２．ハラーゴル碑文の成立背景

２．１．盧山都督と烏碎

前節の釈読結果で示したように，漢文の残存部分からは，本碑の性格や成立の背景に直接関わるような情報をほとんど得ることができない．

しかし，それでも 7 行目に「公盧山人」と，また 10 行目に「盧山都督」と判読することができ，碑文に関連する人物の出自と彼が拜命していた称号とを知りうる．特に都督が重要で，モンゴル高原の諸勢力にこの称号が頻繁に授与されたのは，唐の羈縻支配時代である．したがって，本碑文が成立した年代を，突厥第一可汗国が滅亡した 7 世紀前半の 630 年から突厥が再興された 680 年代にかけての，半世紀あまりの期間にしぼることができる．

そして「盧山」については，かつて本碑の解読結果を仮報告した際，著者は 10 行目に判読できていた「□山都督」を手掛かりに，ここから類推される勢力として 3 つのトルコ系遊牧集団を挙げていた［鈴木 2007, pp. 53-57］．第一が，盧山都督と復元することにより候補となる，九姓鉄勒のひとつ，思結部である［後掲〔史料Ａ・Ｂ〕参照］．第二が，狼山都督で，この場合はカルルクの首領に授与されたものとなる(13)．第三が，陰山都督で，同じくカルルクの謀落部が候補になる(14)．ところが，その後の読み直しで，7 行目と 10 行目に「盧山」の地名を見出すことができた．もはや本碑文が思結部に由来することに疑問を差し挟む余地はなくなったのである．

それでは以上を踏まえた上で，8 行目に判読される「父烏□」の正体を解き明かすべく，関連史料を検討したい．

---

(13) 『旧唐書』巻 194 上・突厥伝上［中華書局標点本, p. 5165］：其の餘衆を鬱督軍（オテュケン）山に處き，狼山都督を置き以て之を統べしむ．なお『冊府元亀』巻 986・外臣部・征討第五［宋版・中華書局影印本, p. 3953］では狼山都督府とする．

(14) 『新唐書』巻 217 下・回鶻伝下・葛邏禄（カルルク）条［中華書局標点本，p. 6143］：顯慶二年（657 年），謀落部を以て陰山都督府と爲し，熾俟部もて大漠都督府と爲し，踏實力部もて玄池都督府と爲し，即ち其の酋長を用いて都督と爲す．後に熾俟部を分ちて金附州を置く．三族は東西突厥の間に當り，常に其の興衰を視れば，附叛常ならず．後に稍や南徙し，自ら三姓葉護と號す．

〔史料Ａ〕『旧唐書』巻 199 下・北狄伝・鉄勒条［中華書局標点本, pp. 5348-5349］

［貞観］二十一年（647 年），契苾・迴紇（ウイグル）等の十餘部落は薛延陀の亡散し殆盡するを以て，乃ち相い繼ぎて歸國す．太宗は各おの其の地土に因り，其の部落を擇（えら）び，置きて州府と爲す．迴紇部を以て瀚海都督府と爲し，僕骨もて金微都督府と爲し，……《中略》……，思結部もて盧山都督府と爲し，……《中略》……，凡そ一十三州なり．其の酋長を拜して都督・刺史と爲し，玄金魚を給い以て符信と爲す．又た燕然都護を置き以て之を統べしむ．

〔史料Ｂ〕『資治通鑑』巻 198・貞観二十年十二月条［中華書局標点本, p. 6242］

［貞観二十年（646 年）十二月］戊寅，回紇（ウイグル）の俟利發（イルテベル）の吐迷度，僕骨の俟利發の歌濫拔延，多濫葛の俟斤（イルキン）の末，拔野古（バヤルク）の俟利發の屈李失，同羅の俟利發の時健啜，思結の酋長の烏碎及び渾，斛薛，奚結，阿跌，契苾，白霫の酋長，皆な來朝す．

両史料は貞観 20 年（646 年）から翌年にかけて，唐がゴビ砂漠の北，漠北の九姓鉄勒諸部に羈縻州府を設置したという著名な記事である．都督府の設置を伝えるのが〔史料Ａ〕であり，唐に帰順した首長を列挙するのが〔史料Ｂ〕である．後者には盧山都督府が置かれた思結部の酋長として「烏碎」という人物が登場する．すでにハラーゴル碑文の 8 行目に「父烏□」と，人名が期待される数文字を判読できていたので，この〔史料Ｂ〕の情報とあわせれば，碑文の当該箇所を「父烏碎」と推定復元できる．すなわち，出土史料中に，編纂史料で記録が残る人物名を見出したことになる．

ところで，著者が前掲の仮報告を提出した 2007 年の段階では，羈縻支配時代に作成された，モンゴル現存の漢文史料をまったく把握できていなかった．したがって，当該時代の史資料の存在形態を比較参照できぬまま結論を下すことには慎重にならざるをえなかった．しかし，このような状況が大転換をとげる．それが 2009 年にはじまる，モンゴル高原における古代トルコ考古学上の新発見であった．

２．２．僕固墓誌の発見

2009 年の 6 月から 7 月にかけて，モンゴル国のトヴ県ザーマル郡に所在する墳丘の発掘が，モンゴル・ロシア合同考古学調査隊によって行われた(15)．ここは首都ウランバートルから北西に約 280 km，トーラ川の東岸（右岸）に近い場所にあたる〔地図〕(16)．その墳丘は直径 30 m ほどの円丘で，高さ約 2.8 m の規模であった．

発掘の結果，地下 6 m に墓道と墓室を備える土洞墓が発見された．墓道は 23 m に達し，墓室は一辺が 3.5 m あまりの正方形で，その上部はドーム形の構造をしていた．墓室からは陶製俑や騎馬人物俑，木製俑，鳥獣像など 150 点以上が出土し，開元通宝も発見された．一見して中国・唐の影響を受けていたことがわかるものであった(17)．

しかし，なにより歴史研究者の耳目を集めたのは，被葬者の墓誌が完存して出土したことである．その被葬者の名は金微都督の僕固乙突(18)，埋葬年は儀鳳三年（678 年）であった．それでは，遺跡の発掘報告書［3M］ならびに墓誌テキストの研究［石見 2014］を参照し，この墓誌の情報を簡単に整理しておく(19)．

---

(15) 遺跡の概況については，2013 年に刊行された発掘報告 3M を参考にした．

(16) この発掘に続き，2011 年，当該遺跡からトーラ川を挟んで約 7 km の草原にある，ボルガン県バヤンノール郡オラーン=ヘレムの墳丘の発掘が，モンゴル・カザフスタン合同考古学調査隊によって実施された．墓誌は出土しなかったものの，墓道には中国風の彩色壁画が鮮やかに残っていたほか，ザーマル郡の墳丘墓を上回る数の俑，金銀製装飾品，宝飾品，ビザンツ金貨などの副葬品が出土した．年代鑑定から 7 世紀後半の遺跡であると結論が出ている［УХ, pp. 227-228］．稿末の関連〔地図〕では 2009 年の発掘現場を「ザーマル」と，2011 年のそれを「オラーンヘレム」と示した．

(17) 東潮氏が，ザーマル郡とオラーン=ヘレムの両墓から出土した遺物と，同時代の中国墓から出土した副葬品とを比較している［東 2013］．

(18) 誌蓋には金微都督とあるのに対して，墓誌 1, 5-6 行目には金微州都督とある．

(19) 正式報告書［3M］の刊行前に発表されている経緯は不明ながら，当該墓誌についての研究に［羅 2011; 楊 2012a&b］がある．

僕固乙突墓誌

【誌　　蓋】右辺 72.5 cm，他三辺 74.5 cm，厚さ 12.5 cm，薄い茶褐色
篆書体「大唐金微都督僕固府君墓誌」（4 行 × 3 字）
【誌　　石】縦 75.0 cm，横 75.5 cm，厚さ約 17.0 cm，黒色の石
楷書体　28 行 × 31 字，罫線あり，誌面の左部に 2 行分空白
【墓誌の構成】誌題［1 行目］，誌序［2-22 行目］，銘［23-28 行目］
【誌序の内容】
①発辞，②祖先（祖父・父）に関する記述，③墓主の人となりと金微州都督の世襲，④西突厥 阿史那賀魯の反乱とその討伐の参加，⑤高宗の泰山封禅への参加，⑥軍功と官品の上進，⑦死去と葬儀

墓主について略述すると，僕固乙突は，貞観九年（635 年）に生まれ，儀鳳三年（678 年）に没した（享年 44）．トルコ系遊牧部族連合の九姓鉄勒を構成する僕固部の首長であった．なお，この僕固は〔史料Ａ・Ｂ〕のごとく，僕骨とも記録されるが，本稿は僕固に統一する．さて，彼の祖父は歌濫抜延といい，かの〔史料Ｂ〕に見られるように，唐から都督を授けられた人物である．祖父の代から金微都督を世襲していたことになる．

このように僕固氏の系譜について大変興味深い情報を得ることができる．しかしながら，本稿が注目するのは，モンゴル高原における羈縻支配時代に関わる一次史料，とりわけ漢文墓誌が出土したという事実そのものである．つまり，僕固部の歌濫抜延の孫の世代の石刻史料が実際に発見されたいま，唐から都督号を授けられ，羈縻支配下に編入された他の鉄勒諸部にも同様に，漢文による石刻史料の存在を想定することは十分に可能であろう．

以上，僕固墓誌の発見に鑑みて，盧山都督府が設置された思結部にも漢文碑文が贈呈されていたものと判断できる．ハラーゴル碑文は，僕固部の歌濫抜延と同じく，唐の羈縻支配を受け入れて盧山都督を称した，烏碎の息子のために建立されたものと考えられるのである．

さて，僕固墓誌にはこれに関連する興味深い記述がある．その誌文の 19-20 行目には「凡そ厥(そ)の喪葬は，並びに官給し，并せて爲(ため)に碑を立てしむ」とあり［3M, p. 98; 石見 2014, pp. 4, 17］，この墳丘墓からの出土品に鑑みれば，彼は墳墓の造営から埋葬品などの荘厳，そして墓誌に至るまで唐の資財援助を得ていたことになる．また墓誌だけでなく，現存していないために確認はできないものの，唐から碑までも賜っている．

そこで，このように唐から碑を下賜された同時期におけるトルコ系遊牧首長の例を探ってみると，647 年に没した突厥の阿史那思摩に行き着く．『通典』には「未だ幾ばくもならずして，京師に卒す．兵部尚書・夏州都督を贈り，昭陵に陪葬す．墳を立つるに以て白道川を象(かたど)り，詔して化州に碑を立てしむ」とある[20]．これについては化州にではないが，彼が培葬された太宗の昭陵のふもとに，螭首と亀趺を備えた「李思摩碑」が現存している[21]．また，同じく昭陵に陪葬された阿史那忠（652 年没）については，螭首に方趺，碑身 388 × 118 × 34 cm を誇る「阿史那忠碑」が現存する［昭陵, pp. 65, 190-192］．これらの碑文の存在に照らせば，ハラーゴル碑文もまた唐の監修を経て，思結部に下賜されたものであったと考えられる．

これはハラーゴル碑文に空格の処理が施されていることからも肯首できる．本碑 5 行目には「乃糸　朝命」と記されている．拓本を精査したところ，唐皇帝の発した命令を指す「朝命」の直前には文字の痕跡がまったく認められない．これが墓誌の作成に唐側の監修が存した証拠になる．なお，前章で引用の報告［OPXOH, pp. 54-57］によれば，碑文のもとあった遺跡には中国式の瓦葺き建物の遺構まで存在したという．これも，僕固乙突墓の副葬品に見られるように，唐からの官給によって造営されたものであろう．

---

(20) 『通典』巻 197・辺防 13・突厥上［中華書局標点本, p. 5416］．阿史那思摩の事績や系譜，その出土墓誌に関わる書誌情報については拙稿［鈴木 2005］を，また，その葬礼については［岳 1995］を参照されたい．

(21) 阿史那思摩は太宗より賜って李姓を称した．彼のこの碑文は，その墓誌銘の記載「仍お爲に碑を立てしむ」という箇所に対応するものであろう［昭陵, pp. 12, 113］．残念ながら碑面の破損が酷く文字は判読できないという［*Ibid.*, p. 13］．

ここで振り返るべき，羈縻支配に関する極めて重要な指摘がある．そもそも『通典』では，突厥第一可汗国の崩壊後，太宗がトルコ系遊牧民から天可汗（テングリ=カガン）と尊称されるに至った経緯を「是の後，璽書を以て西域・北荒の君長に賜うに，皆な《皇帝天可汗》と稱す．諸蕃の渠帥の死亡するは，必ず詔册もて其の後嗣を立つ．四夷に臨統するは，此れ自り始む」と伝えている(22)．この記述をうけた護雅夫氏は，唐の天子が，臣たる諸国・諸族の首長が死亡すれば必ず詔して，その後継を冊立する権利と義務とを保有するにいたった，と強調する［護 1964, pp. 182-183］．

つまり，羈縻支配時代，都督の交替には唐の関与が前提にあった．とすれば，その背景にはかならずや後嗣をめぐる外交交渉があったはずである．そして，その後に期待される都督の襲名や先代都督の葬礼にも，唐の関与を想定できることになる．

これまで，首都の長安・洛陽や唐内地にとどめられたトルコ系遊牧民の王族や首長に対し，特に葬送儀礼に際して唐の関与があったことは，編纂史料の記述のほかにも，皇帝陵の陪葬墓や出土墓誌などの遺物からよく知られていた．しかし，実際はそれだけにとどまるものではなかった．僕固乙突墓やハラーゴル碑文や遺跡が証明してくれるように，都督の称号を授けて遠くモンゴル高原に羈縻していた首長たちに対してさえも，唐は少なからざる財物を供与していたのである．

２．３．唐の羈縻支配と思結部の分布

さて，当の思結部については，断片的な史料ではあるが，羈縻支配時代を通じて唐との関係が伝えられており(23)，碑文の成立背景や年代を考察するにあたって，無視できない．

---

(22) 『通典』巻 200・辺防 16・跋文［中華書局標点本, p. 5494］.

(23) 阿史那賀魯の乱の後，天山山脈方面で唐に叛旗を翻した「思結闕俟斤都曼」なる人物が編纂史料上で確認できるが，これは西突厥の「阿悉結闕俟斤」の誤りである［伊瀬 1955, p. 233; 内藤 1988, pp. 262-263］.

まず『冊府元亀』には，第一可汗国が崩壊した際，貞観四年（630 年）三月のこととして「是の月，突厥思結部の俟斤（イルキン），衆四萬を率いて來降す」[(24)] という記事がある．護雅夫氏も指摘するように［護 1963, p. 434, n. 48］，この記録に対応して，『新唐書』の地理志には「貞觀五年（631 年），思結部落を以て縣境に懐化縣を置き，順州に隷す」という記事があり[(25)]，突厥滅亡の直後，漠南の忻州で唐の羈縻支配に組み込まれた思結部の勢力を確認できる［*Ibid*., p. 413-414］．

ここで〔史料Ｂ〕を振り返ってみると，九姓鉄勒の首長のうち，何人かはイルテベルやイルキンを称していた[(26)]．しかし，思結部はただ「酋長」と記されているのみである．これは，彼の正確な称号が唐に伝わらなかっただけということもあろうが，前掲した『冊府元亀』の記事が伝えるように，既に帰属して来た思結部のイルキンが唐内地に存在していたために，新たに来降してきた集団の首長を「酋長」と記した可能性がある．いずれにせよ当時の思結部は，漠南に数万を数える亡命集団を逃した後でさえ，漠北に羈縻州が設置される程の勢力を誇っていたことになる．

このように，僕固部とならび，思結部が大きな勢力を誇った理由として，モンゴル高原における地政学的な要因を挙げることができよう．編纂史料では『新唐書』に「斛薛は多濫葛の北に處す．勝兵萬人なり．奚結は同羅の北に處す．思結は延陀の故牙に在る．二部兵を合すること凡そ二萬なり」とわずかな記述が残るのみである[(27)]．

しかし，ここでも想起されるのが，護雅夫氏の指摘である．氏はイルテベルとイルキンを擁する部族の比較検討をした際，〔史料Ａ・Ｂ〕に見られる，貞観二十年（646 年）の九姓鉄勒諸部の帰順に対して，その首長がイルテベ

---

(24) 『冊府元亀』巻 985・外臣部 30・征討第四［宋版・中華書局影印本, p. 3946］.

(25) 『新唐書』巻 39・地理 3・忻州・秀容県［中華書局標点本, p. 1006］.

(26) どちらも古代トルコ語の称号であり，可汗を輩出する部族以外の諸部の首長が称したもの．これら二つの称号のうち，比較的有力な部族の首長がイルテベル eltäbär（俟利発）を，比較的弱小な部族のそれがイルキン irkin（俟斤）を，それぞれ称した［護 1963, p. 427］.

(27) 『新唐書』巻 217 下・回鶻伝下・斛薛条［中華書局標点本，p. 6145］.

ルであれば都督府が，イルキンであれば刺史州が置かれた，と結論付けた．ただし，渾・思結・多濫葛をその例外として保留し，かつてイルキンを首長に擁していた思結部については，漠北の盟主であった薛延陀の本拠「故牙」を占めていたために都督府が設けられたのではないか，と推測した［護 1963, pp. 424-426］．著者もこの見解に賛成で，646 年の薛延陀滅亡後，唐は漠北の要衝を占拠した思結部に都督府を設置することで，彼等を羈縻支配維持のための中核部族として遇したのであろう．思結部はその位置取りによっても，都督府を設置するに足るという評価を得ていた．

それでは，モンゴル高原における遺跡の所在地という観点から，思結部を考察したい．ハラーゴル碑文が発見されたセレンゲ県マンダル郡は，匈奴の王墓であるノヨン=オール遺跡からわずか 40 km ほどしか離れていない(28)．両地はともに，オルホン川に流入する幾多の河川を育む山岳森林地帯に位置し，豊かな森林草原での遊牧が期待できる．確かにトルコ系遊牧民の聖地と目されていたのは，現在のハンガイ山脈一帯に地理比定される「オテュケン山」であった(29)．しかし，紀元前後より有力な遊牧民の遺跡が複数営まれる場所を自らの牧地としていた点は，思結部の勢力を評価するに際して材料のひとつになろう．

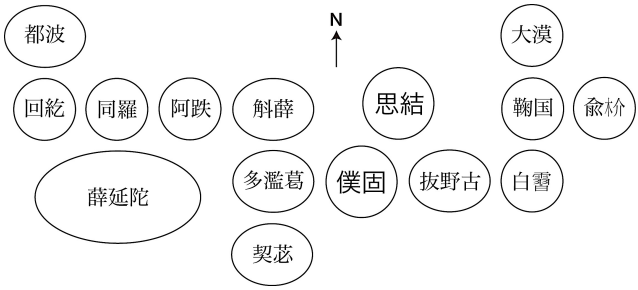
また，ここは僕固墓誌が発掘されたボルガン県ザーマル郡から東北 175 km に位置する．石見氏は僕固墓誌の出土地と編纂史料の記録を利用して「鉄勒諸部分布示意図」を作成した［石見 2014, pp. 10-11］．今それに，ハラーゴル遺跡の所在地によって思結部の位置を加えれば，次の分布図のとおりである．

---

(28) 旧名ノイン=ウラ遺跡．トヴ県バットスンベル郡に所在する．唐に羈縻された都督府の位置を推測した［譚 1982, pp. 42-43］は，盧山都督をオルホン川最上流域に置くが，セレンゲ県マンダル郡とはかなりの距離がある［cf. 石見 2014, p. 10］．

(29) 古代トルコ語では Ötükän yïš「オテュケン山」と，漢籍では烏特鞬山や鬱督軍山などと記録される山岳森林地帯のことで，トルコ系遊牧民にとっての聖地であったことがわかっている［Gabain 1949, p. 36; 山田 1951, pp. 62-65］．遺跡の分布を踏まえた考古学的な観点から，モンゴル高原の中央に位置するハンガイ山脈を中心に，その北方のオルホン・セレンゲ川流域に，さらに東方のトーラ川流域を加えた一帯であったと地理比定されている［林 2002, p. 126］．

〔図６〕鉄勒諸部の分布図（ゴシック体は出土史資料による地理比定）



これを見れば，思結部がトルコ系遊牧諸族の中心を占めていたことは明らかである．まして彼等が薛延陀の本拠をも掌握していたというのであれば(30)，南のかた唐に通ずるルートもひらけてくる．さらに鉄勒諸族の北には，イェニセイ川上流域のミヌシンスク盆地を拠点とするキルギズが控えていたが［cf. 松田 1970, pp. 237-239］，彼等も突厥第一可汗国の滅亡後は唐に朝貢していた．したがって，当時のトルコ系遊牧民の状況を鳥瞰してみれば，思結部が中央ユーラシア世界の南北に通じる要衝に位置していたことを容易に看取できる．以上から，遊牧諸族の叛乱が頻発するなか，対外遠征を遂行してゆかねばならぬ唐にとって，遊牧諸族の制禦や羈縻支配の維持はもちろん，さらなる軍事力の確保といった観点からも，思結部の存在は無視できないものであったと考えられるのである．

ところが，盧山都督に率いられた思結部は，668 年，モンゴル高原から河西回廊の涼州管内に遷されてしまったようである．

(30) ウランバートルから西へ約 80 km，トーラ川の北岸に現存する，トヴ県アルタンボラック郡のウンゲトゥ遺跡を，薛延陀の夷男可汗（645 年頃没）のものとする学説が，ヴォイトフ氏によって提案されている［Войтов 1987, pp. 104-106］．しかし，この説は本人も認めるように根拠薄弱で，推測の域を出ていないという．なお，このウンゲトゥ遺跡やこれまでの調査概要については，［Войтов 1996, p. 31 & p. 39, Рис. 13; 林 2005, pp. 85-91; Бичээс II, pp. 18-22, 60-62］等を参照されたい．結局，先行研究のごとく［ex. 段 1988, p. 93］，薛延陀の分布は推測の域を出ていない．

〔史料Ｃ〕『新唐書』巻 43 下・地理 7 下・隴右道［中華書局標点本, p. 1132］
回紇 州は三，府は一あり．
蹛林州[思結の別部を以て置く]．金水州．賀蘭州．盧山都督府[思結部を以て置く]．
右，初め燕然都護府に隷す．總章元年（668 年），涼州都督府に隷す．

盧山都督府が遷徙された理由は残念ながら判然としない．しかし，この涼州で羈縻された思結部の始末は以下のように詳しく記録されている．

〔史料Ｄ〕『旧唐書』巻 103・王君㚟伝［中華書局標点本, p. 3192］
初め，涼州界に迴紇・契苾・思結・渾の四部落有り(31)，代(よ)よ酋長爲り．君㚟微(わず)かなりし時，涼府に往來するに，迴紇等の輕んずる所と爲る．君㚟河西節度使と爲るに及び，迴紇等は怏怏として，其の麾下に在るを恥ず．君㚟 法を以て之を繩(ただ)さんとすれば，迴紇等は積怨し，密に人を使わし東都に詣り自ら墻状を陳べしめんとす．君㚟 遽(にわか)に驛を發して奏すらく，「迴紇部落は制し難し．潛に叛謀有り」と．上は中使をして往きて之を按問せしむれば，迴紇等は竟に理を得ず．是に由りて，瀚海大都督の迴紇承宗は瀼州に長流せられ，渾大德は吉州に長流せられ，賀蘭都督の契苾承明は藤州に長流せられ，盧山都督の思結歸國は瓊州に長流せらる．

この開元年間（713~741 年）初頭に繫年される記事によれば［小野川 1940, p. 29］，盧山都督の思結帰国という人物が，ウイグル・契苾・渾の都督とともに，王君㚟を讒言した咎で流刑に処せられている．したがって，漠北で盧山都督を授けられた思結部の首長が，モンゴル高原の故地で都督を世襲し，埋葬遺跡を造営しうる下限は，〔史料Ｃ〕が示す，河西に遷されたと覚しき 668 年となる．

以上，これまでの議論をまとめておきたい．両石刻史料の記述を比較し，そこに編纂史料などから読みとれる羈縻州の情報を付け加えたものが，次の〔表〕である．

(31) この四部族の来歴を伝える漢籍史料の問題点については［西田 2014］を参照．

〔表〕ハラーゴル碑文と僕固乙突墓誌の比較

	ハラーゴル碑文	僕固乙突墓誌
部　族	思　結	僕　固
称　号	盧山都督	金微都督
系　譜	烏碎→息子［被葬者］→？→帰国	歌濫拔延→思匐→乙突［被葬者］
年　代	646 年都督任命→生没年不明（下限668 年）→？→瓊州配流	646 年都督任命→生没年不明→678 年没
発見地	セレンゲ県マンダル郡 （ズーンハラー市）	トヴ県ザーマル郡 （ショローン=ボンバガル）

このように整理してみると，初代の盧山都督こと烏碎の子息を，かつまた，思結帰国以前の先任都督のひとり（恐らく帰国の祖父か父親）を，ハラーゴル遺跡における被葬者，ならびに同碑文の被顕彰者とみなし得る．それ故，思結部では少なくとも三代にわたって，都督号をモンゴル高原で襲っていたことが確実である．また視点を変えれば，両石刻史料は，羈縻支配下の都督継承が唐によって把握されていた事実を証明している．

ただし，前章で引用したハラーゴル遺跡についての報告［OPXOH, pp. 54-57］によれば，思結部は僕固部とは異なり，中国・唐様式の墳丘墓ではなく，突厥第一可汗国の埋葬遺跡に連なるトルコ系遊牧民の様式に則って，都督を葬ったようである〔図４〕．また，墓碑の碑額部分に人面を優先して彫らせたように，唐の官給物に対して独特の意匠を施し得た．このように思結部が遊牧民としての独自性を貫くことができたのは，やはり僕固部よりも遠方にいたからなのか，あるいは葬礼や埋葬墓の造営年代が少なくとも十年程度は先行していたからなのか，検証すべき課題は多々ある．しかし，少なくとも唐が，思結部の意向に沿った葬礼を容認しつつ物資を提供していた点は，モンゴル高原における盧山都督の擁する勢力の規模と，唐の羈縻支配に対する彼等の貢献度の現れとみて間違いのないところであろう．

３．突厥碑文のイズギル族

３．１．キョル=テギン碑文のイズギル族

ところで，モンゴル高原の思結部を議論するにあたり，避けては通れない事実がある．それは，思結部に同定される集団が突厥碑文に確認されていることである．

さて，この突厥碑文とは，唐の羈縻支配を克復して再び独立政権を打ち立てた，突厥第二可汗国の時代（682~740 年）に，モンゴル高原で誕生した文献史料である．突厥文字で古代トルコ語を記したものであり，中央ユーラシア世界の歴史上はじめて，遊牧民独自の文字で彼等の言葉を刻むという，文字通りの記念碑でもあった［cf. 鈴木 2014, pp. 207-209］．

そこで，羈縻支配時代の史資料が新たに増えたことを手掛かりに，もう一度，この文献史料を検証してみたい．今回ここに引用する史料は，突厥碑文の代表格ともいえるキョル=テギン碑文である．これは第三代毗伽可汗（ビルゲ=カガン）（位 716~734 年）の弟である闕特勤（キョル=テギン）（732 年没）の死に際して唐から贈与されたものである．碑文の西面は玄宗御筆の漢文面であるが，その他の南・東・北面などを使って突厥文字が刻まれている．

それでは，以下，突厥碑文のテキストと翻訳を提示する．古代トルコ語のテキストについては，ローマ字による再建形のみを提示している．突厥文字からの転写ならびに再建形式は［鈴木 2014, p. 211］の転写表に準拠する．斜体で残画の判読結果を，太字で推定復元を，下線で翻字に表記されない母音類を示した．拙訳中の（　）内は著者が意味を補った部分である．

なお，本稿のテキストは京都大学所蔵拓本を底本とし，広島大学・東洋文庫所蔵拓本などを校勘して作成したものである．これまで発表されている拓本や碑文の写真については［Atlas 1892, Tабл. XXIV-XXV; Heikel 1892, Tab. 11-12; Orkhon, pp. 24-25］を参照されたい．

〔史料Ｅ〕キョル=テギン碑文［北面 3-4 行目］

[3] ……《前略》…… : ăčim qa*y*an : eli : qamša*y* : boltuqïnta : bodun : ellig ekkäg*ü*[32] : boltuqïnta : izgil : bodun : birlä : sünüšdimiz : köl tegin : alp : šalčï : aqïn : binip :

[4] opla*y***u t**äg*d*i : ol at anta : tüš*d*i izgil : anta[33] : ölti : toquz oγuz : bodun : käntü : bodunïm : är*ti* : täŋri : yer : bu*l*γaqï*n* : üčün : yaγï : boltï : bir yïlqa : beš yolï : sünüšdimiz : aŋ ilk : toγo balïqda : sünüšdi*m*iz :

[3] 我が叔父（カプガン=カガン，黙啜）の国（クニ）が不安定になったとき，民と国持てる者（支配者）とがふたつに分かれたとき，我々はイズギル族の民と戦った．闕特勤（キョル=テギン）は強（アルプ）きシャルチの白馬を駆って，

[4] 疾駆し（彼等を）攻撃した．彼の馬はそこで斃れ，イズギル族はそこで死んだ．トクズ=オグズの民，彼等自身は（そもそも）我が民であった．天地が混乱したため，彼等は敵になった．一年に五度，我々は（彼等と）戦った．最初に，都護城（トゴ=バリク）[34]で我々は（彼等と）戦った．

ここに Izgil イズギルと呼ばれる部族が登場する．これは今のところ，突厥碑文において，ただこの一箇所にのみ在証されている固有名詞である．

---

(32) ラドロフ氏は ü l g i k l g と翻字した部分で，そのままでは意味不確定であった［ATIM 1894, p. 24-25］．ここをテキン氏が修訂し，ilig ikägü と再建していたが［GOT 1968, p. 236］，著者が諸拓本を校勘した結果，確かに i l g i k g (ü)と翻字できた．本稿はテキン氏の読みを採用するが，トルコ語の再建方法はクローソン氏に準じているため［ED, p. 141］，上掲の再建形となった．

(33) ラドロフ氏がテキストを復元して［ATIM 1894, pp. 24-25］以来，この部分は bodun と読まれていたが，京都大学所蔵拓本の精査によって正しくは anta と刻まれていたことが判明した．つまり，anta「そこで」という句をもちいて，主人公の愛馬とイズギル族の死を対比させていたのである．

(34) 古代トルコ語碑文に記録された Toγo Balïq を都護城と解したのは岩佐精一郎氏であった［岩佐 1936, p. 98］．この都城は，漠北の瀚海都護，すなわち安北都護の首府にあたる．詳しくは，カラ=バルガスン遺址から発見された漢文壁記の分析によって，都護城をウイグル可汗国における首都 Ordu Balïq オルドゥ=バリクの前身であると結論付けた［石見・森安 1998, pp. 109-110］を見よ．

このイズギル族は，碑文研究の黎明期，碩学ヒルト氏によって，漢籍に伝えられる思結部のことであると比定された［Hirth 1899, p. 134］．そして，その後は，これがなかば通説として流布している［ex. 羽田 1919, p. 361; 小野川 1943, pp. 308, 383, n. 419; 芮 1998, pp. 226, 258, n. 52］(35).

一方，直接〔史料Ｅ〕に言及するものではないが，漢文史料中の思結が，*sïqar / *sikär の音写であったとする見解がある．これはまず，925 年，コータン王の使者が敦煌で書いた，所謂 Staël-Holstein 文書において，コータン語で *sīka'rä* と記録されている部族を思結にみなしたことが出発点になっている［Bailey 1951, p. 511, n. 29.2］．そしてつぎに，このベイリー氏の見解をうけたハミルトン氏が，古代トルコ文献学の観点から，思結の原音を*sïqar / *sïγar と復元すべきと主張するに至ったのである［Hamiliton 1955, pp. 1-2, n. 2］(36).

その他，このイズギル族について，特定の部族名を想定しない慎重な立場もあるが［ex. GOT, p. 337; Şirin User 2009, p. 157］，いずれにせよ研究史を回顧してみると，これまで両論はおたがい排他的な立場をとらず，並立してきたようである(37)．これら「イズギル族＝思結部」と「思結＝*sïqar / *sïγar」の両説を，どう捉えるべきであろうか．

３．２．突厥第二可汗国と思結部

イズギル族＝思結部の等式については，既に小野川秀美氏によって，碑文〔史料Ｅ〕に対応する漢文史料が紹介されており［小野川 1943, p. 383, n. 148］，その部族比定は揺るぎなき鉄案と考えられる．

---

(35) とりわけ中国人研究者が「イズギル族＝思結部」説を支持する傾向にあるなか，ひとり岑仲勉氏のみは，イズギル族を 716 年に黙啜可汗を殺害したバヤルク部の「頡質略」の音写であると考えている［岑 1958, pp. 904, 1126］．

(36) 「思」の中古音は*_si_ で［GSR, p. 256, 973a］，「結」の中古音は*_kiet_ である［GSR, p. 112, 393p］．漢字音写された古代トルコ語の在り方を網羅的に調査された笠井幸代氏のデータによれば，「思」は古代トルコ語音 r, s, z を写す漢字に排列されている［Kasai 2014, pp. 86, 124］．

(37) 北狄伝の訳注では典拠が示されていないが，両論が紹介されている［佐口・山田・護 1972, pp. 10-11］．ただし後者の転写を sïqït とするが，その根拠は不明である．

〔史料Ｆ〕『新唐書』巻 215 上・突厥上［中華書局標点本, p. 6048］
默啜 九姓を討たんとし，磧北に戰う．九姓 潰えて，人畜皆な死すれば，思結等の部 來降す．帝 悉く之に官(にん)ず．

これは，第二代のカプガン=カガンこと默啜の治世（691~716 年）末期に生じた突厥国内の動乱を物語る漢文史料である．突厥と九姓鉄勒が衝突した結果，敗れた九姓鉄勒諸族がゴビ砂漠をわたって唐に帰順して来た．そのなかに思結部が存在したのである．この『新唐書』の記録では思結部が九姓鉄勒を代表しているが，他方の『通典』や『旧唐書』等では阿布思とある(38)．しかし，小野川氏が別註で〔史料Ｆ〕における思結部の存在を確定させる史料を紹介している［小野川 1943, pp. 376-378, n. 129］．

〔史料Ｇ〕『冊府元亀』巻 974・外臣部 19・褒異［宋版・中華書局影印本, p. 3872］
［開元三年（715 年）］十月，己未，北蕃の投降せし九姓の思結都督 磨散に授けて左威衞將軍と爲し，大首領 斛薛の移利殊功もて右領軍衞將軍と爲し，契(ママ)都督の邪没施もて右威衞將軍と爲し，……《中略》……，並(み)な員外置たらしめ，舊に依りて刺史を兼ねしむ．紫袍・金帶・魚袋・七事・綵帛各おの三百段を賜いて，蕃に還(かえ)るを放(ゆる)す．

この史料には筆頭に思結都督を名乗る磨散なる人物が登場し，思結部が默啜によって敗残の憂き目に遭い，唐に投降していたとある．まさにこれらの記事は突厥碑文〔史料Ｅ〕の思結の敗北と軌を一にするものである．

ここで〔史料Ｃ・Ｄ〕に立ち返ると，突厥第二可汗国勃興以前，既に盧山都督の思結帰国に率いられた思結部が河西方面に遷されていた．ところが，実際にはその後も，思結部は都督が授与されるレベルで遊牧生活をおくっていたことになる．小野川氏も指摘するように，第二可汗国時代においても，

(38) 『通典』巻 198・辺防 14・突厥伝では「布思」と［中華書局標点本, p. 5439］，他方，『旧唐書』巻 144 上・突厥上では「阿布思」とある［中華書局標点本, p. 5173］．これらが「思結」の誤りであると，［羽田 1919, pp. 358-359］が指摘している．

モンゴル高原に思結部の集団が確と存在していたのである［小野川 1943, p. 383, n. 148］．まさにこれらの編纂漢籍による記録こそが，突厥碑文の当該箇所に記されたイズギル族を思結部に比定すべき根拠である．

そもそも突厥碑文において，九姓鉄勒による国内騒乱の劈頭にイズギル族が刻まれたのは，イズギル族こと思結部が，九姓鉄勒を統制するために真っ先に矛先を向けるべき強敵であったことを証明している．そして，それは本稿がこれまで史資料をもって論証してきた通りである．思結部は，キョル=テギン碑文のような突厥可汗国の記念碑に登場する，突厥のライバルとしてまことに相応しい内実を備えた遊牧勢力であったのである．

３．３．中央ユーラシアにおける思結部の拡散

ところで，キョル=テギン碑文の建立から二世紀ほど時代が下るが，思結部が広い分布を持っていたことを裏付ける文献がある．それはイブン=ファドラーンの『ヴォルガ・ブルガール旅行記』であり，前述のヒルト氏も自説の根拠たる文献に挙げていたものである［Hirth 1899, p. 134］(39)．

すなわち，同書の第三章「サカリーバ王国」には，サカリーバ王の同盟部族として登場するスワーズ部族の一党派を率いる首長が「アスカル王（Malik Askal）」と記録されている．家島彦一氏の注釈によれば，このアスカルとは，エスケル（Eskel, Eshkel, Iskel）とも読まれる．そして，この名は Ibn Rustah と *Ḥudūd al-ʻĀlam* が伝えるブルガール族に属する 3 つの遊牧集団のひとつ，イシュキル族（Ishkil, Asghil）もしくはアシュギル族（Ashgil）に一致する，という［家島 2009, pp. 194, 247, n. 152］．

まさにこの記述におけるイシュキル族の存在を根拠に，ヒルト氏が思結部の西遷を想定したのである［Hirth 1899, p. 134］．これは 10 世紀前半の記録だが，〔史料Ｃ・Ｄ〕が示すように，7 世紀後半からすでに河西地方に散居していた思結部の在り方を振り返ってみても説得力がある．

---

(39) 本書は 10 世紀初頭，アッバース朝のカリフ=ムクタディルによる外交使節の随行員としてサカーリバ王国のもとに派遣された Ibn Faḍlān イブン=ファドラーンが書き残した記録である．本稿は家島彦一氏の訳註［家島 2009］に依拠している．

さて，このヴォルガ川流域まで達した集団の例が示すように，つまりイズギルが後代，アスカル，エスケル，イシュキルもしくはアシュギルと呼ばれたように，河西回廊においても同様の現象が起こった可能性はある．

そもそも問題の遊牧集団は，コータン語で *sīka'rä* と記載されていた．語頭音の消失現象を踏まえれば，これはほぼ同時代のイブン=ファドラーンが伝える Askal という語形を想起させる．それならば，元来モンゴル高原においてトルコ語で Izgil と呼ばれていた彼等が，移住した先々でそれぞれ異なった名前によって呼び習わされるようになったのではないだろうか．

あるいは河西に移住し，コータン語で記録された集団については，以下のような可能性もあろう．まず〔史料Ｃ・Ｄ〕のごとく，モンゴル高原から河西回廊に遷徙させられたイズギル族は，唐によって「思結」と漢字音写されて公式に登記された．その後，彼等は河西回廊に居住することになるが，10 世紀前半には，古代トルコ語による原音よりも，漢語による「思結」という呼び方が優勢となり(40)，その漢語音の方を耳にして，件のコータン王の使者が *sīka'rä* と書き記した．すなわち，思結部の河西移住とその後の定着の結果，彼等の呼称が漢語を介してコータン語に伝えられたと考えるのである．

いずれにせよ 10 世紀前半の河西回廊に漢語で言うところの思結部が，すなわちコータン語の伝える *sīka'rä* 族が存在したことは事実である．しかし，その呼び名を未だ在証されていない*sïqar / *sïγar に求めるには無理がある．やはり遊牧民自らが書き記した証拠が求められる以上，また，新たな石刻史料・考古資料で裏付けられる思結部の存在感が強く認められる以上，Staël-Holstein 文書の *sīka'rä* もまた，根本的には Izgil イズギルというトルコ語音で呼称されていた原集団に帰すべきである．久しく議論されることがなかった「思結＝*sïqar / *sïγar」説であるが，確たる在証例あるいは積極的な傍証をもって補足されない現在，もはや成り立たぬものと見て大過なかろう．

---

(40) 9 世紀後半から 11 世紀前半にかけては，帰義軍節度使政権が敦煌オアシスを支配していた．吐蕃支配を克復した後，敦煌あるいは河西回廊の諸オアシスは引き続き胡漢雑居の住民構成であったが，9 世紀後半の張議潮・張淮深時代には積極的な漢化運動が展開されていたという［cf. 土肥 1980, pp. 253-257］.

おわりに

本稿は，これまで情報がほとんど公開されることがなかった，セレンゲ県マンダル郡で発見されたハラーゴル碑文について，その学術報告［OPXOH, pp. 54-57］を紹介し，その漢文銘文の解読を試みた．そして，断片的に残る字句と編纂史料の記述，さらに近年発掘された僕固乙突墓誌に関する情報から，ハラーゴル碑文が，九姓鉄勒の思結部に関連する石刻史料であり，具体的には唐の羈縻支配時代の劈頭において盧山都督を拝命した烏碎の息子に対して，唐から寄贈された碑文であったことを解き明かした．

ハラーゴル碑文を遺した思結部は，文献史料その他から類推されるように，7 世紀中葉の時点から 8 世紀中葉に至るまで相当の勢力を誇っていたと見るべきである．唐の羈縻支配を，あるいはモンゴル高原における九姓鉄勒の展開を論じてゆく上で重要な史資料を得ることができたものと思われる．

以上を踏まえた上で，羈縻支配時代の一次史料がまた新たに認められたトルコ系遊牧民について考察すべき課題は，唐からモンゴル高原にもたらされた文物が促した彼等の変化である．羈縻支配を享受する見返りとして得た唐の資財が，草原遊牧民の物質文化を変容させていたのは，本稿の示した事例に即して間違いない．今や羈縻支配時代の歴史的意義を物質的側面からも解析できる段階になったといえよう．なんとなれば，本稿では詳しく言及することができなかったが，ハラーゴル遺跡や碑文の形態はトルコ遊牧民の文化変容を多角的に考察できる要素を数多く含んでいるからである．

他方，ハラーゴル遺跡や僕固乙突墓の存在は，唐の羈縻支配が「化外」に，すなわち北方辺州の外縁にもおよんでいた確たる証拠でもある．従来は専ら辺州で管理を受ける遊牧民に対する唐の支配が議論されてきた［cf. 譚 1990; 劉 1998; 朱 2000, pp. 253-260; 石見 2001, pp. 24-27］．もちろん，我々はそれ以外の検討材料を持たなかったのであるが，今後は唐の世界帝国としての影響力をより外縁にまで追求することができるのではないだろうか．

かかる中央ユーラシア世界と東アジア世界に重なりあう課題を文献史料・考古資料の双方向から解き明かしてゆくことを，著者の責務としたい．

略号

ATIM = W. Radloff, *Die Alttürkischen Inschriften der Mongolei.* 1. Lieferung 1894; 2. Lieferung 1894; 3. Lieferung 1895; Neue Folge 1897; Zweite Folge 1899. St. Petersburg. [Rpr.: in 2 vols. Osnabrück 1987]

Atlas = W. Radloff, *Atlas der Alterthümer der Mongolei. Arbeiten der Orchon-Expedition. (Атласъ древностей Монголіи. Труды Орхонской Экспедиціи.)*, 1. Lieferung 1892; 2. Lieferung 1893; 3. Lieferung 1896; 4. Lieferung 1899, St. Petersburg.

ED = G. Clauson, *An Etymological Dictionary of Pre-Thirteenth-Century Turkish*. Oxford, 1972.

GOT = T. Tekin, *A Grammar of Orkhon Turkic*. (Uralic and Altaic Series 69), Bloomington / The Hague, 1968.

GRS = B. Karlgren, *Grammata Serica Resensa*. Stockholm, 1957.

Orkhon = D. Vasiliyev *et al.* (eds.), *Orkhon. The Atlas of Historical Works in Mongolia. (Orhun. Moğolistan Tarihi Eserleri Atlası)*, Ankara, 1995.

ОРХОН =М. Жолдасбеков & Қ. Сартқожаұлы, *Орхон ескерткіштерінің толық Атласы*. Астана, 2005. [Rpr.: 2007]

Бичээс II = Т. Осава, К. Сүзүки, Р. Мөнхтулга, *БИЧЭЭС II*. Улаанбаатар, 2009.［大澤孝・鈴木宏節・R.ムンフトルガ『ビチェース II ── モンゴル国現存遺跡・突厥碑文調査報告 ──』ウランバートル：SOFEX Co., LTD.／大阪大学リポジトリ http://ir.library.osaka-u.ac.jp/dspace/handle/11094/26038（2015 年 6 月 18 日確認）］

ЗМ (Заамар) = А. Очир, С.В. Данилов, Л. Эрдэнэболд, Ц. Цэрэндорж, *Эртний нүүдэлчднийн бунхант булшны малтлага, судалгаа. (Төв аймгийн Заамар сумын Шороон бумбагарын малтлагын тайлан)*, Улаанбаатар, 2013.

УХ (Улаан хэрм) = А. Очир, Л. Эрдэнэболд, С. Харжаубай, Х. Жантегин, *Эртний нүүдэлчднийн булшны малтлага судалгаа*. Улаанбаатар, 2013.

昭陵 = 昭陵博物館・張沛（編著）『昭陵碑石』西安：三秦出版社, 1993.

文献目録

※引用の際には初出年代を表記したが, 単行本に収録された論考は再録後の頁数を記す.

Bailey, H.W. 1951: “The Staël-Holstein Miscellay,” *Asia Major* 2-1.［Nawabi, M. (ed.), *Opera Minora – Articles on Iranian Studies –*, vol. 2, Shiraz, 1981, pp. 493-537］

Gabain, A. von 1949: “Steppe und Stadt im Leben der ältesten Türken,” *Der Islam* 29-1, pp. 30-62.

Hamilton, J. 1955: *Les Ouïghours à l’époque des Cinq Dynasties d’après les documents chinois*, (Bibliothèque de l’Institut des Hautes Études Chinoises 10), Paris.

———— 1962: “Toquz-Oγuz et On-Uyγur,” *Journal asiatique* 250, pp. 23-26.

Heikel, A.O. 1892: *Inscriptions de l’Orkhon, recueillies par l’expédition finnoise 1890 et puliées par la Société finno-ougrienne*. Helsingfors.

Hirth, F. 1899: “Nachworte zur Inschrift des Tonjukuk,” ATIM, Zweite Folge.

Kasai, Y. 2014: “The Chinese Phonetic Transcription of Old Turkish Words in the Chinese Sources from 6th -9th Century – Focused on the Original Word Transcribed as *Tujue* 突厥 –,”『内陸アジア言語の研究』29, pp. 57-135.

Klyaštornyi, S.G. & Livšic, V.A. 1972: “The Sogdian Inscription of Bugut Revised,” *Acta Orientalia Hungaricae* 26-1, pp. 79-102.

Mackerras, C. 1972: *The Uighur Empire according to the T’ang Dynastic Histories – A Study in Sino-Uighur Relations 744-840*. Canberra.

Stark, S. 2008: *Die Alttrükenzeit in Mittel- und Zentralasien – Archäologische und historische Studien* –, (Nomaden und Sesshafte 6), Wiesbaden.

Şirin User, H. 2009: *Köktürk Ötüken Uygur Kağanlığı Yazıtları – Söz Varlığı İncelemesi*. Konya.

Войтов, В.Е. 1987: “Каменные изваяния из Унгету,” *Центральная Азия. Новые памятники письменности и искусства*. Москва, pp. 92-109.

———— 1996: *Древнетюркский пантеон и модель мироздания в культово-поминальных памятниках Монголии VI-VIII вв.*, Государственный музей искусства народов Востока.

Каржаубай, С. 2002: *Объединенный каганат тюрков в 745-760 годах – по материалам рунических надпицей* –, Астана.

Қаржаыбай, С. 2003: *Орхон мұралары. (Тарихи – танымдық этнографиялық әдебиет)*, Астана.

Санжмятав, Т. 1993: *Архангай аймгийн нутаг дахь эртний түүх соёлын дурсгал*. Улаанбаатар.

東　潮 2013「モンゴル草原の突厥オラーン・ヘレム壁画墓」『徳島大学総合科学部人間社会文化研究』21, pp. 1-50.

伊瀬仙太郎 1955「金山都護府の設置」『中国西域経営史研究』東京：巌南堂書店, pp. 217-243.

岩佐精一郎 1936「突厥の復興に就いて」和田清（編）『岩佐精一郎遺稿』東京：岩佐傳一（発行）, pp. 77-167.

石見清裕 1986「唐の突厥遺民に対する措置」『中国社会・制度・文化史の諸問題』（日野開三郎博士頌寿記念論集）福岡：中国書店.［再録：石見 1998, pp. 109-147］

———— 1998『唐の北方問題と国際秩序』東京：汲古書院.

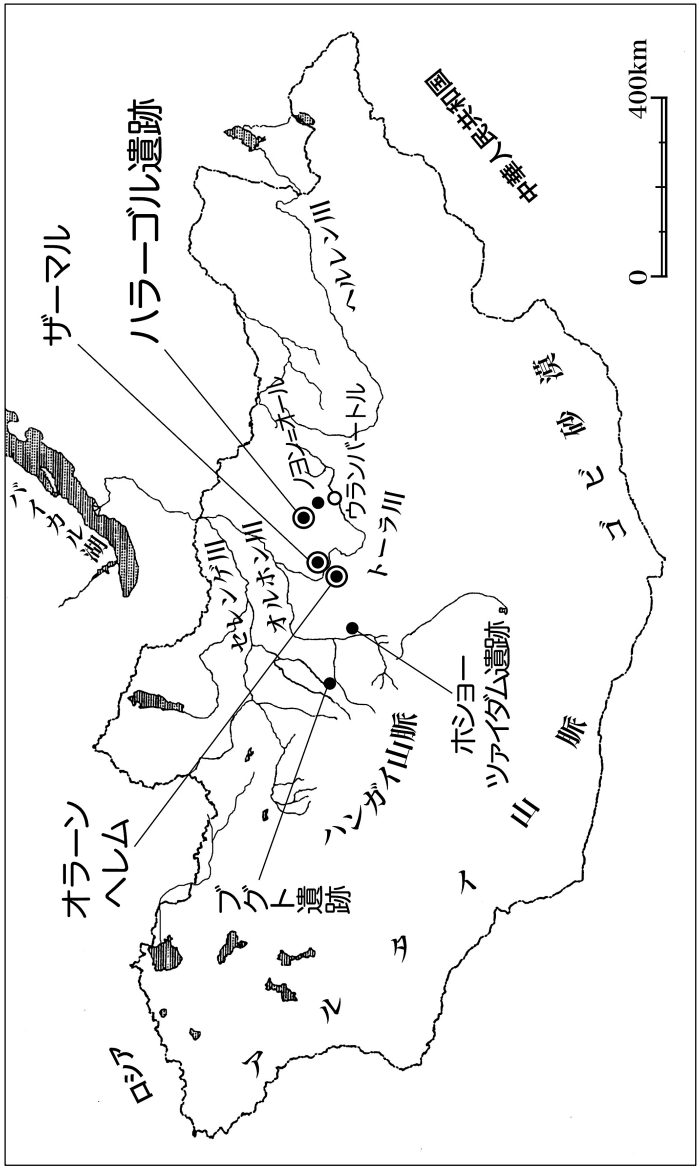
———— 2001「唐の国際秩序と交易」『特集 九世紀の東アジアと交流』（アジア遊学 26）東京：勉誠出版, pp. 23-38.

――― 2014「羈縻支配期の唐と鉄勒僕固部 ―― 新出「僕固乙突墓誌」から見て ――」『東方学』127, pp. 1-17.
石見清裕・森安孝夫 1998「大唐安西阿史夫人壁記の再読と歴史学的考察」『内陸アジア言語の研究』13, pp. 93-110.
大澤　孝 2014「西突厥におけるソグド人」森部豊（編）『ソグド人と東ユーラシアの文化交渉』（アジア遊学 175）東京：勉誠出版, pp. 234-260.
小野川秀美 1940「鉄勒の一考察」『東洋史研究』5-2, pp. 1-39.
――― 1943「突厥碑文訳註」『満蒙史論叢』4, pp. 249-425.
片山章雄 1981「Toquz Oγuz と「九姓」の諸問題について」『史学雑誌』90-12, pp. 39-55.
佐口　透・山田信夫・護　雅夫（訳注）1972『騎馬民族史 2 ―― 正史北狄伝』（東洋文庫 223）東京：平凡社.
鈴木宏節 2005「突厥阿史那思摩系譜考 ―― 突厥第一可汗国の可汗系譜と唐代オルドスの突厥集団 ――」『東洋学報』87-1, pp. 37-68.
――― 2007「モンゴル国セレンゲ県発見の漢文碑文 ―― 七世紀後半のモンゴリアにおける羈縻支配関連史料 ――」松田孝一（研究代表者）『内陸アジア諸言語資料の解読によるモンゴルの都市発展と交通に関する総合研究（課題番号 17320113）平成 17 年度～19 年度科学研究費補助金基盤研究（B）ニューズレター』01, 枚方：大阪国際大学, pp. 49-58.
――― 2014「突厥碑文から見るトルコ人とソグド人」森部豊（編）『ソグド人と東ユーラシアの文化交渉』（アジア遊学 175）東京：勉誠出版, pp. 198-216.
土肥和義 1980「帰義軍（唐後期・五代・宋初）時代」榎一雄（編）『講座敦煌 2 敦煌の歴史』東京：大東出版社, pp. 233-296.
内藤みどり 1988『西突厥史の研究』東京：早稲田大学出版部.
――― 2004「突厥・ソグド人の東ローマとの交流と狼伝説」『史観』150, pp. 29-50.
羽田　亨 1919「九姓回鶻と Toquz Oγuz との関係を論ず」『東洋学報』9-1.［修訂再録：『羽田博士史学論文集 上巻 歴史篇』京都：東洋史研究会, 1957, pp. 325-394］
林　俊雄 1999「草原世界の展開 ―― 中世の中央ユーラシア ――」藤川繁彦（編）『中央ユーラシアの考古学』（世界の考古学⑥）東京：同成社, pp. 263-339.
――― 2002「遊牧民族の王権 ―― 突厥・ウイグルを例に ――」『岩波講座 天皇と王権を考える 第三巻 生産と流通』東京：岩波書店, pp. 115-139.
――― 2005『ユーラシアの石人』（ユーラシア考古学叢書）東京：雄山閣.
松田壽男 1970『古代天山の歴史地理学的研究（増補版）』東京：早稲田大学出版部.
護　雅夫 1963「鉄勒諸部における eltäbär, irkin 号の研究」『東洋学報』46-3.［増補再録：護 1967, pp. 398-438］
――― 1964「突厥と隋・唐王朝」『古代史講座 10 世界帝国の諸問題』東京：学生社.［増補再録：護 1967, pp. 161-223］
――― 1967『古代トルコ民族史研究 I』東京：山川出版社.

家島彦一（訳註）2009『ヴォルガ・ブルガール旅行記』イブン・ファドラーン（著），（東洋文庫 789）東京：平凡社.
山田信夫 1951「テュルクの聖地ウトュケン山」『静岡大学文理学部研究報告・人文科学』1.［再録：『北アジア遊牧民族史研究』東京：東京大学出版会, 1989, pp. 59-71］
吉田　豊・森安孝夫 1999「ブグト碑文」森安孝夫・A.オチル（共編）『モンゴル国現存遺蹟・碑文調査研究報告』豊中：大阪大学・中央ユーラシア学研究会, pp. 122-125.
岑　仲勉 1958『突厥集史』上・下，北京：中華書局.
段　連勤 1988『隋唐時期的薛延陀』（隋唐歴史文化叢書）西安：三秦出版社.
劉　美崧 1989『両唐書回紇伝回鶻伝疏証』（中国辺疆史地研究資料叢書）北京：中央民族学院出版社.
劉　統 1998『唐代羈縻府州研究』（周秦漢唐研究書系）西安：西北大学出版社.
羅　新 2011「蒙古国出土的唐代僕固乙突墓誌」『中原与域外 —— 慶祝張広達教授八十嵩壽研討会論文集』台北：国立政治大学歴史学系, pp. 57-63.
栄　新江 2007「新出吐魯番文書所見唐龍朔年間哥邏禄部落破散問題」『西域歴史語言研究集刊』1, pp. 13-44.［西村陽子（訳）『内陸アジア言語の研究』28, pp. 151-185］
芮　伝明 1998『古突厥碑銘研究』上海：上海古籍出版社.
譚　其驤 1982『中国歴史地図集 第五冊（隋唐五代十国期）』上海：地図出版社.
———— 1990「唐代羈縻州述論」『紀念顧頡剛学術論文集』下，成都：巴蜀書社.［再録：『長水集続編』北京：人民出版社, 1994, pp. 133-155］
楊　富学 2012a「唐代僕固部世系考 —— 以蒙古国新出僕固氏墓誌銘為中心 ——」『西域研究』2012-1, pp. 69-76.
———— 2012b「唐代回鶻僕固部世系考 —— 以蒙古国新出僕固氏墓誌銘為中心 ——」『高台魏晋墓与河西歴史文化研究』蘭州：甘粛教育出版社, pp. 577-589.
岳　紹輝 1995「唐《李思摩墓誌》考析」『碑林集刊』1995-3, pp. 51-59.
朱　振宏 2000「唐代羈縻府州研究」『中正歴史学刊』2000-3.［再録：『隋唐政治・制度与対外関係』台北：文津出版社, 2010, pp. 245-286］

付記

本稿は，文部科学省科学研究費補助金・若手研究（B）［課題番号 25770257］による研究成果の一部であり，2014 年 2 月 28 日から 3 月 1 日にかけて明治大学（駿河台校舎）で開催された，第 3 回“中国中世（中古）社会諸形態”国際大学院生若手研究者学術交流論壇での口頭報告「唐の羈縻支配に関するモンゴル高原の漢文石刻三題」の一部を増補したものである.



〔地図〕ハラーゴル碑文関連地図